

■第20回院内集会を開催しました

10月11日(木)、第20回院内集会を参議院議員会館B104会議室で開催しました。行動隊員、賛助会員をはじめ40人余が参加しました。

集会では、まず山田理事長が「福島原発行動隊が今、これからやろうとしていること」について紹介した後、谷岡郁子参議院議員(みどりの風)が「福島原発をどうする」と題して講演しました。



その他、9月から10月にかけての活動報告、川

内村復興・支援活動の報告、請願署名活動の呼びかけ(次頁参照)、原発ウォッチャー報告「使用済み核燃料の状況と取り出し」など盛りだくさんの内容でした。

また集会では、国際的に活動している松村昭雄氏の他、牧山ひろえ参議院議員(民主党)、福島瑞穂参議院議員(社民党党首)、姫井由美子参議院議員(国民の生活が第一)の諸氏(下写真左より)が挨拶しました。この他、7名の国会議員の秘書諸氏も出席しました。



講演「福島原発をどうする —この国の品格をまもるために—」 谷岡郁子参議院議員 (みどりの風)

Jヴィレッジから福島第一までの20キロ。本来ならばたわわに実った金色の稲穂が風に揺れているはずの土地はセイタカアワダチソウで一面に覆われていた。

●福島第一は戦場だった

福島第一は、見えない放射能との戦いが毎日行われている戦場だった。福島第一は「マイクロ・シーベルトの世界」ではない。あそこは「ミリシーベルトの世界」だ。そこで働いている人たちは「緩慢な形での特攻隊」と言えるのではないのか。

この日本でいちばん危ない場所で「特攻隊」として戦い続けている人たちを私たちはどのように遇しているのか。危険手当をもらっていない人がいる。補償されない人、被ばく管理されていない人がいる。

●福島第一はサステイナブル(持続可能)ではない

地震と爆発でさんざん揺さぶられ、高い温度と湿度と塩水にやられ、中性子が飛び放題の過酷な環境。1号機から3号機までは点検にすら入れない。補修も、部品の交換もできない。1年間でおそらくは10年分の劣化が進んでしまう環境。機械工学的にみてもこれから何か問題が起きる可能性はきわめて高いだろう。

そして被ばくの問題がある。いちばん大事でしかも枯渇するのは技術と能力を持った人的資源だ。しかしベテランであればあるほど、被ばく線量は満杯になり、これ以上働き続けることができない状況になる。

この事故収束の事業は一目も利益を生み出すことはない。出費ばかりが大きい。そうしたところに民間の営利企業がどれだけ必要で十分なお金を注ぎ込むだろうか。

もしも万全を期しているというのであれば、いちばん大変な仕事をしている作業員たちに、呼吸が変なフィルター付きマスクではなく、楽に呼吸ができる空気清浄機能付きのマスクをなぜ使わせないのか。

●国家が事故収束の責任を取るべきだ

毎日劣化が進んでいく状況の中で、万全を期して必要なことを今後何十年もかけて責任をもってやっていく。そのことを国家以外に誰にできるというのか。この放射能との戦争は国家の責任においてやらなければならない。福島第一を危険なままにしておいて、福島の復興も日本の再生もありえない。

だが政府も官僚も、あまりにも重大な現実を目前にして思考停止に落ち込んでしまっているかのようだ。

「私の責任で大飯を動かします」と言うのなら、福島第一の土地から放射能をすべて取り除くことが本来の責任であろう。それができないのであれば少なくとも被災者の面倒をしっかりと見ること、そして福島第一の最後まで面倒をみることに、それが国の責任だ。

●この国の品格をまもるために

日本の強さは弱肉強食の競争で勝つという強さではない。大震災の後、日本が世界を驚嘆させたあの強さ。お互いに支え合い、分かち合い、病人や小さな子どもにパンを譲ることができる強さ。日本の強さは、みんなのためにいちばん辛い仕事を引き受ける人たちが、中央から指示されるのではなく、現場で創意工夫をし、そして力を合わせる術の強さだ。

原発を放置し続けて高度成長を享受してきた私たちの世代が今責任を取らなければならない。この国の大人たちが尊敬に値する大人たちであることを次の世代の若者たちに見せていかなければならない。

この福島第一に私たちがどのように取り組んだのかということは、まさに日本がこれからも強い国であり続けるかどうか、日本が高い文化をもった品性のある国であり続けるのかどうかということの証左なのだと思う。



■東京電力(株)から拒否回答

福島原発行動隊が東京電力株式会社に行った「福島第一原子力発電所の視察」要請に対して、同社は9月28日(金)、「ご要望にお応えすることは難しい」と文書で回答しました。

回答書によれば、拒否回答の理由は「廃炉に向けた現地での作業が引き続き困難な状況下で行われていること等に鑑み、現場作業工程への影響等を配慮して(…)一般の方のご視察はお断りしている」ためだということです。

当該回答は、去る9月14日に伊藤邦夫・東大名誉教授を先頭に、福島原発行動隊の隊員7名が東京電力本社を訪れ、高瀬賢三原子力・立地業務部長に視察要望書を提出したことに応えたものです。

福島原発行動隊は今後とも継続して視察要望を行っていく予定です。



福島原発行動隊の伊藤邦夫・東大名誉教授(右)に東電の回答書を手渡す高瀬部長

■東北・北海道地区で交流会を開催しました

10月6/7/8日の連休期間に、山田理事長と膝を交えて語り合う地域集會を、仙台、盛岡、郡山、室蘭で開催しました。

6日(土)昼には仙台で、夕刻には盛岡で、それぞれ6~7人の行動隊員・賛助会員が参集して食卓を囲んで語り合う会となりました。山田理事長から川内村帰還事業支援や、米国訪問、請願署名運動の開始など最近の状況と方針について説明があり、その後、福島第一原子力発電所での行動を開始できない現状をどう考えるかという突き詰めた議論もありました。

7日(日)に行われた郡山の集會では、川内村役場郡山出張所「あさかの杜ゆふね」を会場に、川内村から避難されている方々を含め15人あまりの参加者がありました。話し合いは主として川内村の帰還がテーマとな

りました。

翌8日(祝)午後、室蘭市民会館での集會は、比較的若い参加者も含め、福島原発行動隊のことを初めて知ったという方が中心となって総勢20人ほどが参加しました。活発な討論が行われ、福一の現状が「仮設の設備」で進められていることを初めて知ったという声もありました。

■地域交流会のお知らせ

10月に引き続いて、11月には次の日程で地域交流会を開催します。

長野市： 11月10日(土) 17時~19時
新潟市： 11月11日(日) 14時~16時
札幌市： 11月12日(月) 18時半~20時半
静岡市： 11月18日(日) 18時~20時

参加ご希望の方は、メール、FAX、電話で、事務局・篠田えみこあてご連絡ください。

またそれぞれの現地(札幌以外)で、会場手配などのお世話をしていただけの方がが必要です。可能な方は事務局までご連絡ください。

■「請願署名」のお願い

公益社団法人 福島原発行動隊は、福島第一原発の事故収束作業への参画を要求した「請願署名」活動を開始しました。

この請願署名は内閣総理大臣および衆参両院議長に宛てたもので、「①福島第一原発の事故収束作業を東京電力から切り離し、廃炉を目指した国家プロジェクトを発足させる法制化」と、「②多重下請けによる現場作業を排し、作業管理および被ばく管理を一元化したマネジメント体制の確立」を要求するものです。

皆さまにはぜひともこの請願署名の趣旨をご理解いただき、ご家族や地域の方々に対して署名を働きかけていただくようご協力をお願いいたします。

なおこの請願署名活動は10月20日から12月15日まで行い、来年1月に日本国政府に提出する予定です。

請願署名用紙は、福島原発行動隊のウェブサイトに掲載しておりますので、お手数ですがダウンロードしてご活用ください。

■原発ウォッチャー月例報告(2012年9月分)

項目	東電発表内容	原発ウォッチャー所見
原子炉の冷却	各炉とも注水量合計が0.1~0.2m ³ /h減少しているが、格納容器内温度は2.7~6.9℃低下。	最暑期を過ぎたため水量減少によるトラブルは当面生じないであろう。
冷却水Cs濃度	1号機建屋北西コーナーでサンプル採取したCs137の濃度が、次第に低下してきている。 2011/5/27 290万 Bq/cm ³ 2011/11/25 19万 Bq/cm ³ 2012/9/20 7万 Bq/cm ³	燃料デブリの状態が安定しており、冷却水と接触する新しい破面などがほとんど発生していないと想定される。
滞留水貯蔵	9/18現在の貯水量総計20.4万トン、貯水容量22.9万トン。8.6万トン分増設中、さらに8万トン計画。将来計画総容量70万トン。	増設中の8.6万トン中5.4万トンは地下貯水槽(底部ベントナイト+2層PEシート張)。安全性についての検討内容報告は見られない。
多核種除去装置(ALPS)	セシウム以外の放射性元素(62核種)除去確認試験結果、検出限界未満を達成。	10/4までのColdテスト、本格稼働時期は規制庁と調整。早期安定稼働が待たれる。
敷地境界空間線量(構内からの追加分評価値)	現状9.67mSv/年。遮蔽や、敷地境界から離れた位置への移動で0.74mSv/年を達成できる計画。	敷地境界の実線量ではなく、構内からの追加線量の値であることに注意。
使用済み燃料プール	4号機から取出した未使用燃料2本が健全であることを確認。 3号機プール内に鉄骨滑落事故発生。線量、水位などに変化見られず。	腐食が見られなかったことは成果。他の燃料棒の変形有無は未知。 鉄骨滑落は玉かけ作業の初歩的なミス。安全対策が望まれる。